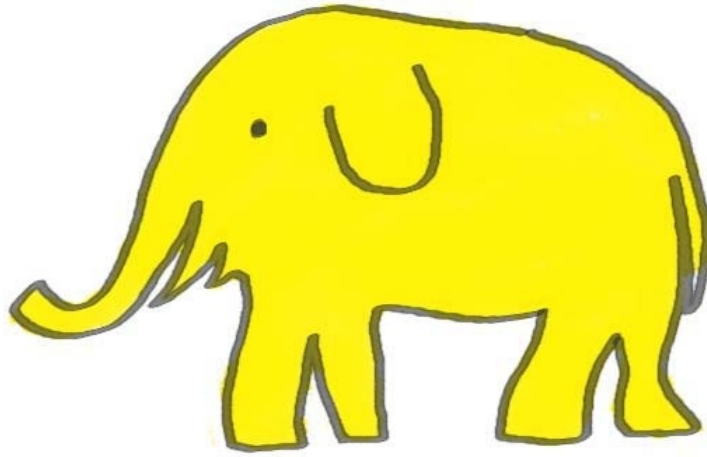
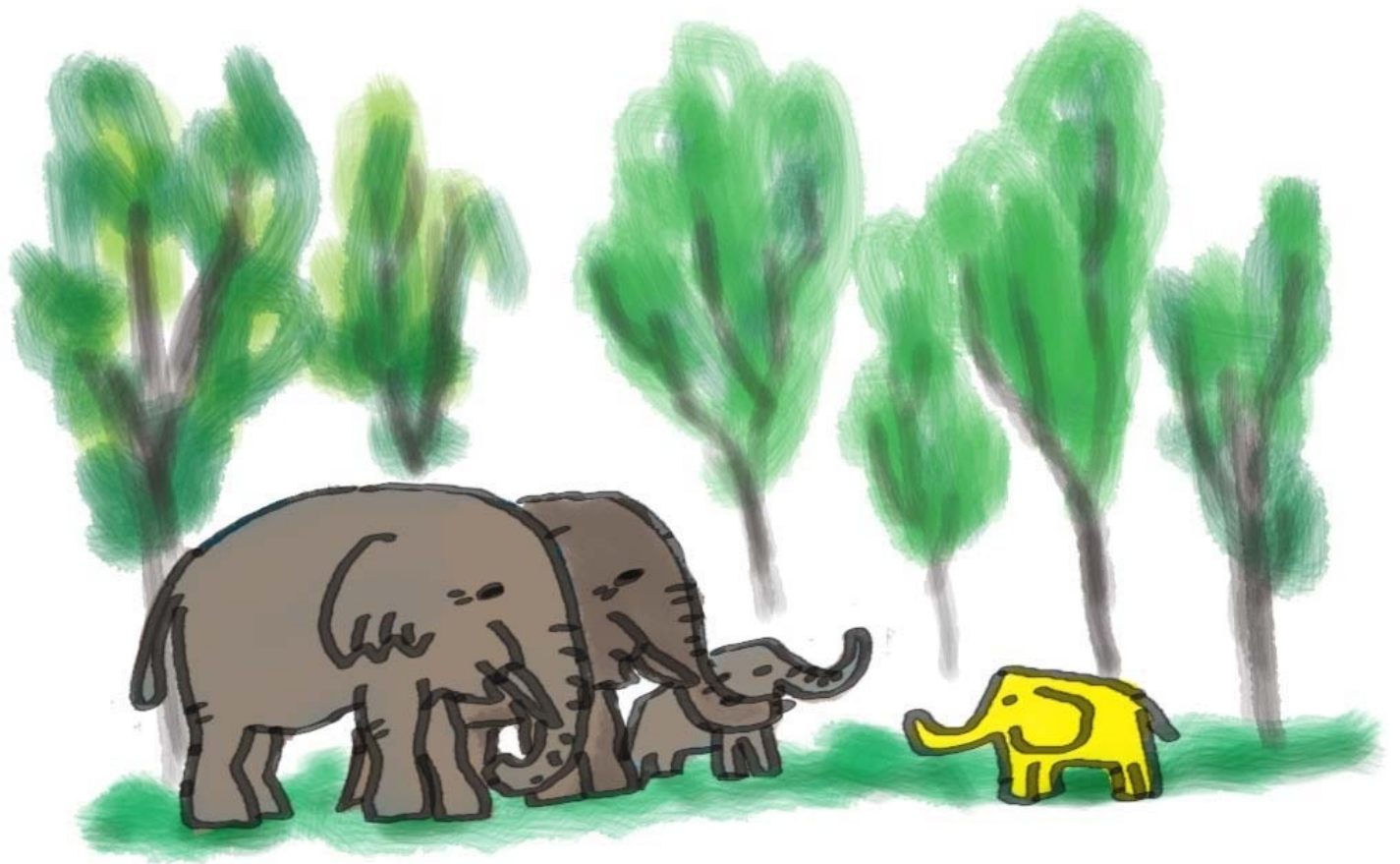


# 一人ぼっちの黄色いゾウ

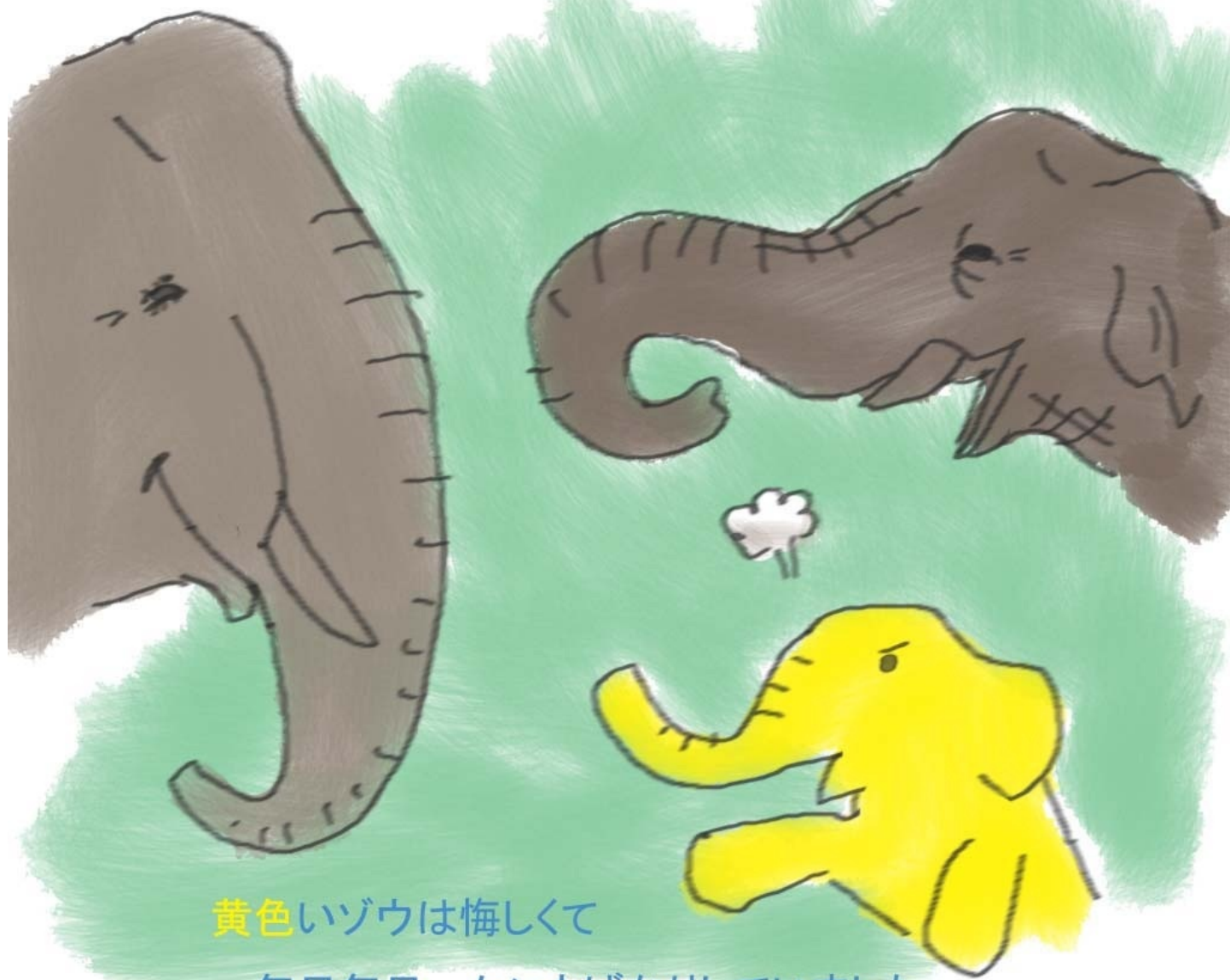


にしざか らいと



とある森の奥深く 大きな大きなゾウの群れの中に  
どういわけか一匹だけ 黄色いゾウがおりました。

黄色いゾウは 体が黄色いというだけで  
毎日毎日 笑われました。



黄色いゾウは悔しくて  
毎日毎日 ケンカばかりしていました。

母さんゾウは言いました。

「坊や 黄色いことを  
恥ずかしがってちゃいけないわ  
+ あなたは特別なゾウなのよ。  
そう、あのユニコーンのように  
黄色い事に誇りを持つんですよ。」



それからもう一つ 大切な事はね  
誰かを恨むなんてつまらない事はせずに  
みんなが幸せになる方法を考えなさい。  
そうすればあなたはきっと 幸せになれるわ。

それはもの凄い大嵐の日のことでした。

川の水があふれて

大洪水が起きました。

森の木はなぎ倒されて

いろんなものが流されました。



「お母さあああん！」

「坊や、坊やあ！」

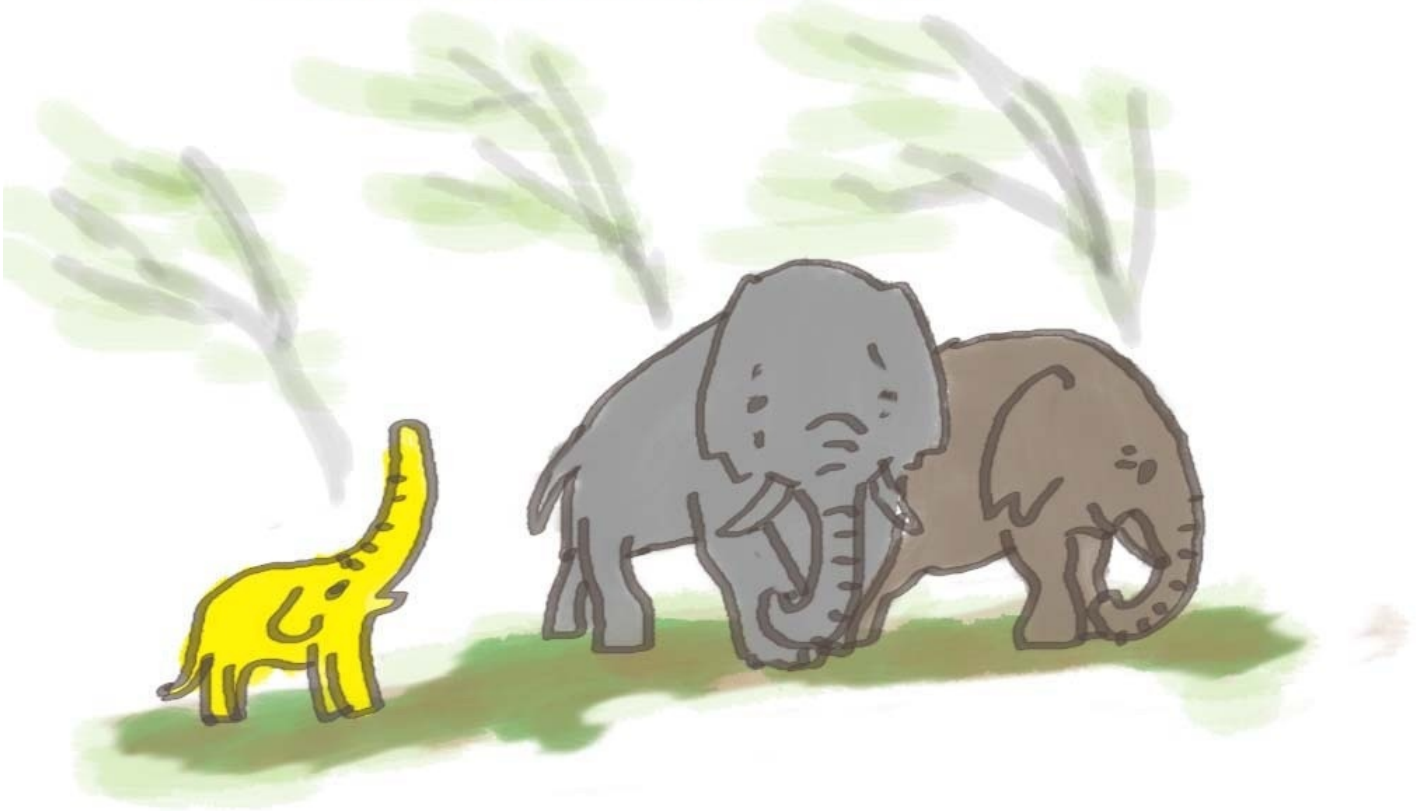
なんということでしょう。優しくったお母さんも

大洪水に流されてしまったのです。

黄色いゾウは森の仲間に言いました。

「どうしてお母さんを助けてくれなかったのさ？」

仲間のゾウは困った様子でした。



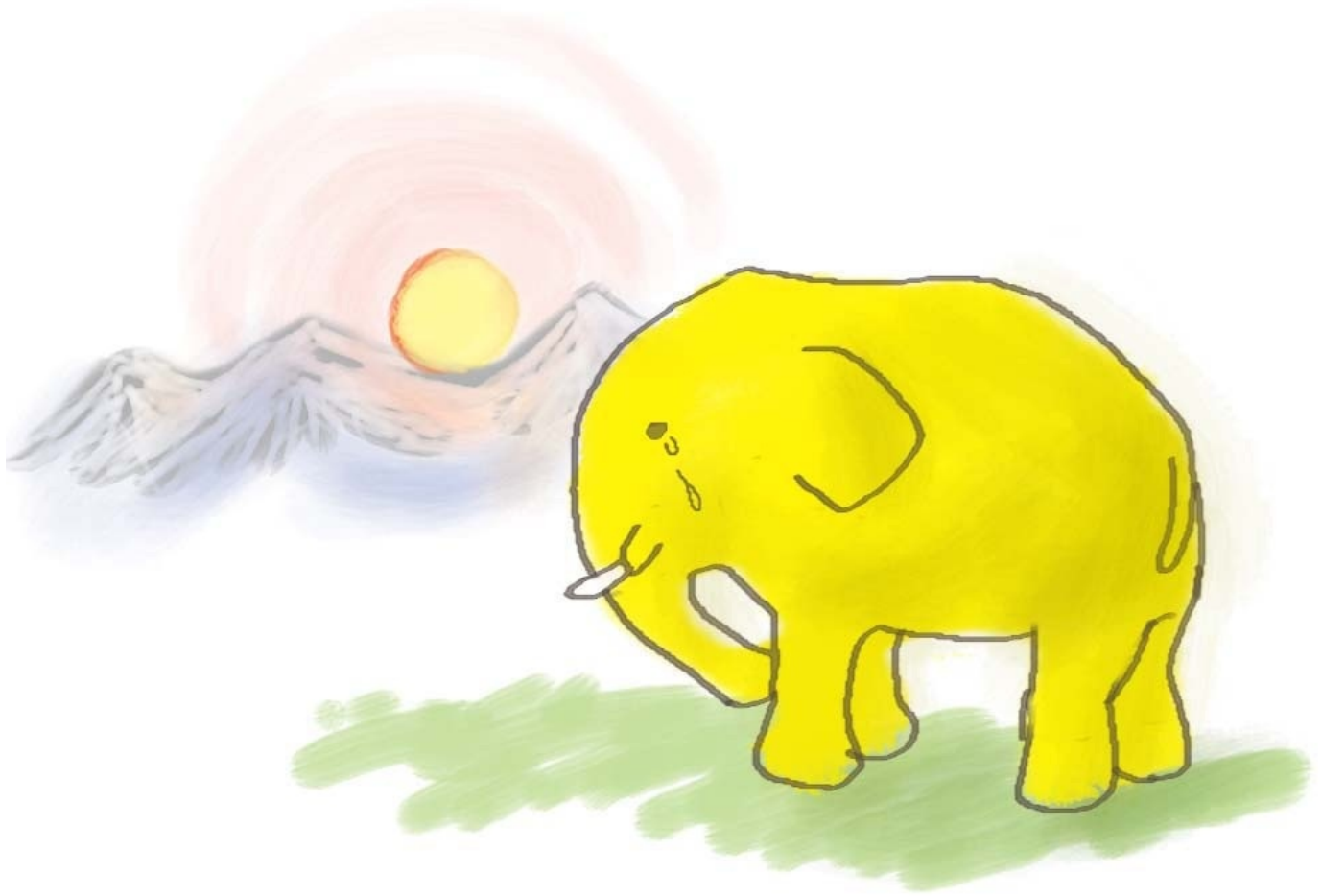
「お前も見ただろ、あの洪水を・・・」

気の毒だが あれじゃあ しかたがなかったんだ」

黄色いゾウは一人ぼっちになってしまいました。

黄色いゾウは

それから悲しい日々を過ごしました。

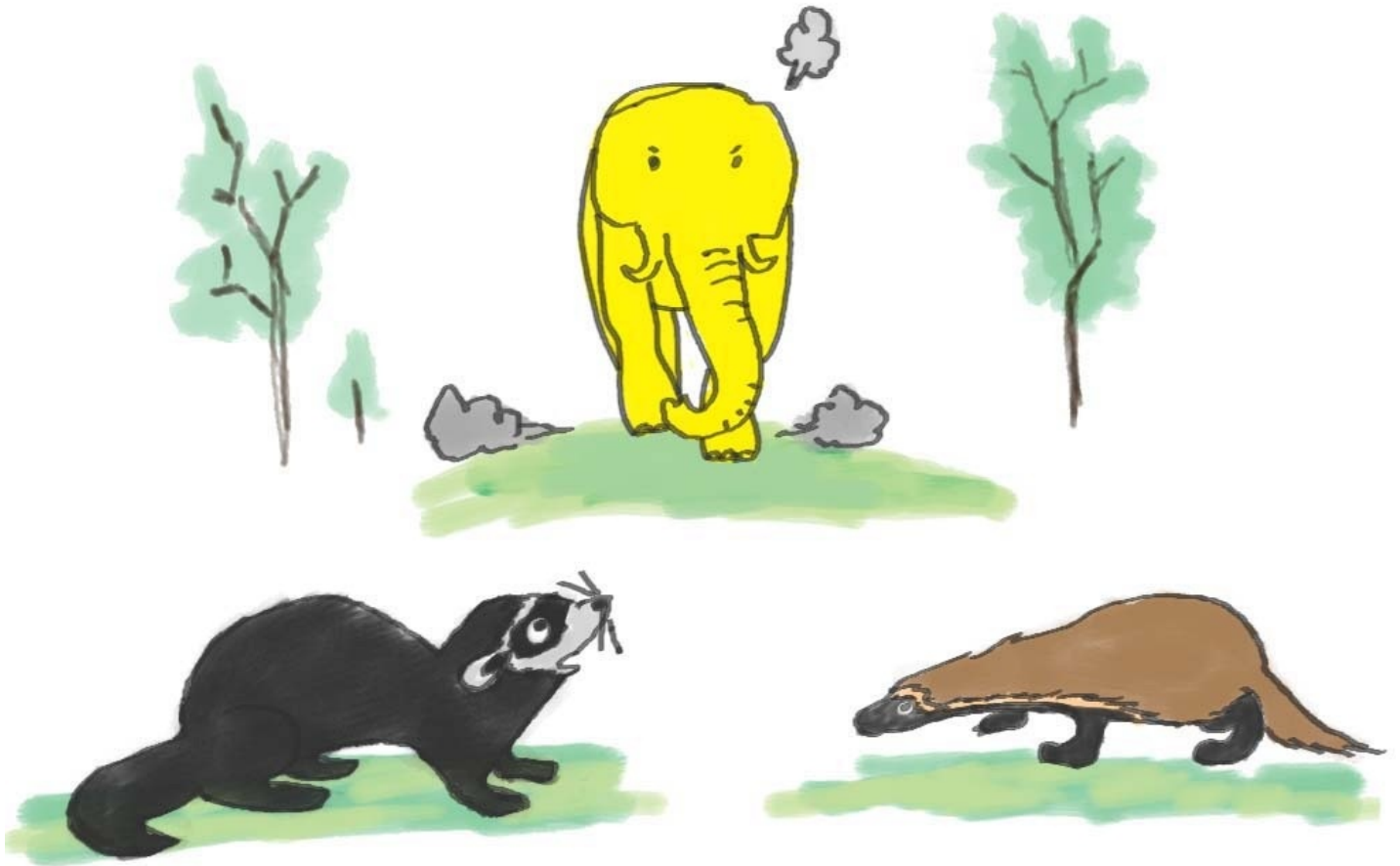


大人になるまで ずっとっひとりぼっちでした。

黄色いゾウは みんなの前では泣きませんでした。

かわりにいつも怒ってばかり。

黄色いゾウはいつのまにか 森の嫌われ者になっていました



「おいおい見ろよ！ 怒りんぼうの黄色いゾウが来るぞ」

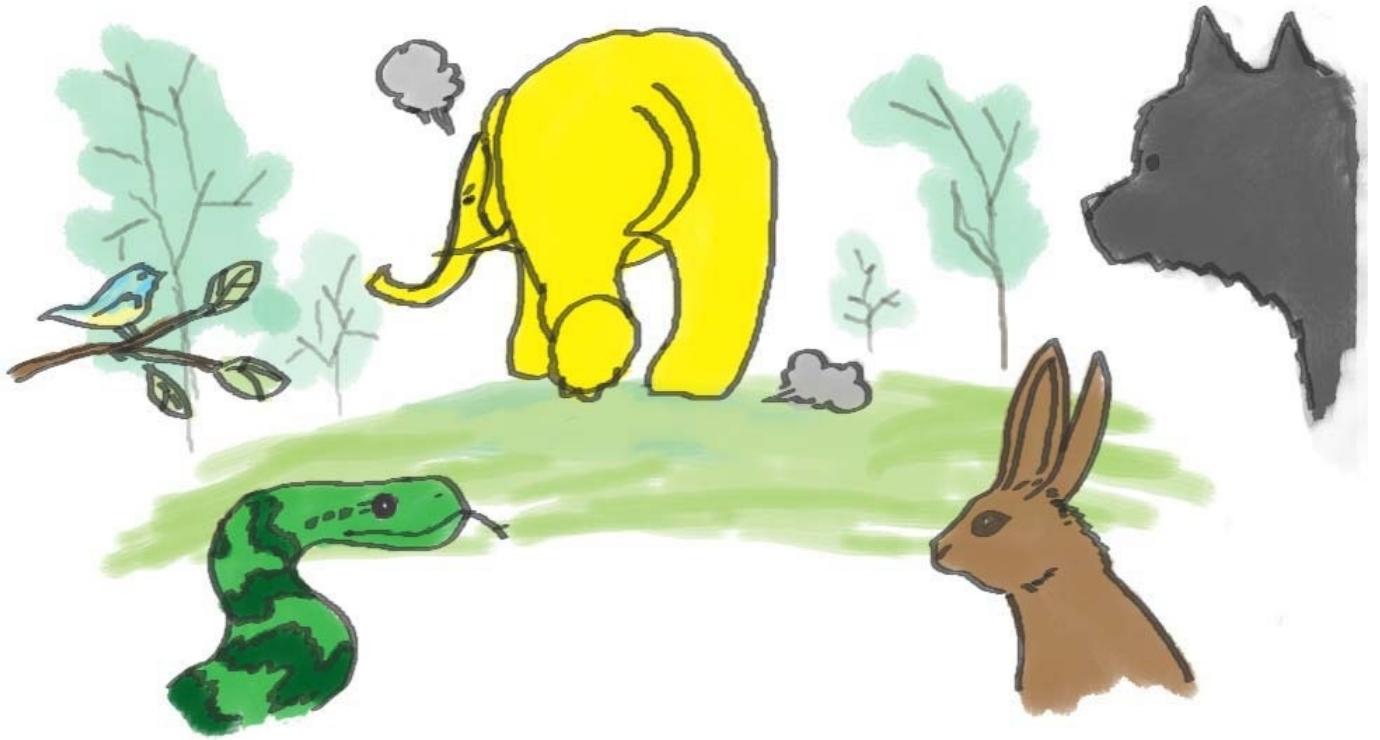
「さあさあ逃げよう、とばっちりはごめんだぜ」



「さあさあ、笑いな！

黄色いゾウが黄色いお尻をふりふりさせて歩いているよ

さあ おかしいだろ？この黄色いおしりがおかしいだろう？」



黄色いゾウは いつも憎まれ口ばかり言っていました。

森の仲間達はそんな黄色いゾウと友達になろうとは

思いませんでした。

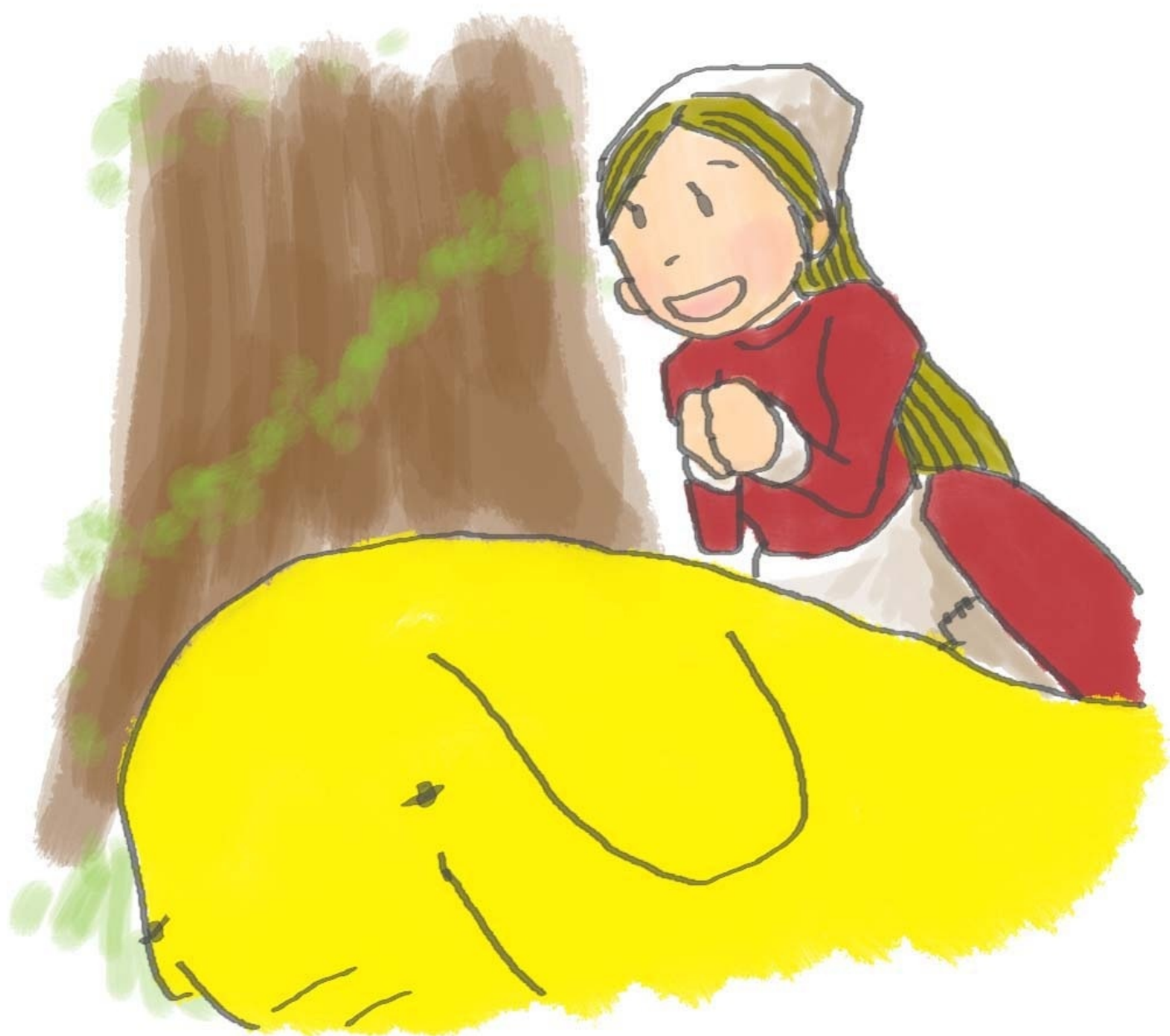
だから 黄色いゾウはいつもひとりぼっちでした。



ある日 一人の少女が  
黄色いゾウのところへ  
やってきました。



「まあ素敵！！黄色いゾウなんて夢見たい」





「きっとユニコーンのような  
特別なゾウなんだわ」

黄色いゾウは その言葉にとってもあたたかいものを感じました。

「ユニコーンのように 誇りをもちなさい・・・」

そう言っていたお母さんの言葉を思い出していたのです。

その日の晩 森に嵐がやってきました。



それはひどい嵐でした。

黄色いゾウは

あの日のことを

思い出しました



黄色いゾウは川へとかけ出しました。



誰かの叫ぶ声が聞こえてきます。

「大変だあ！川があふれそうだあ！」

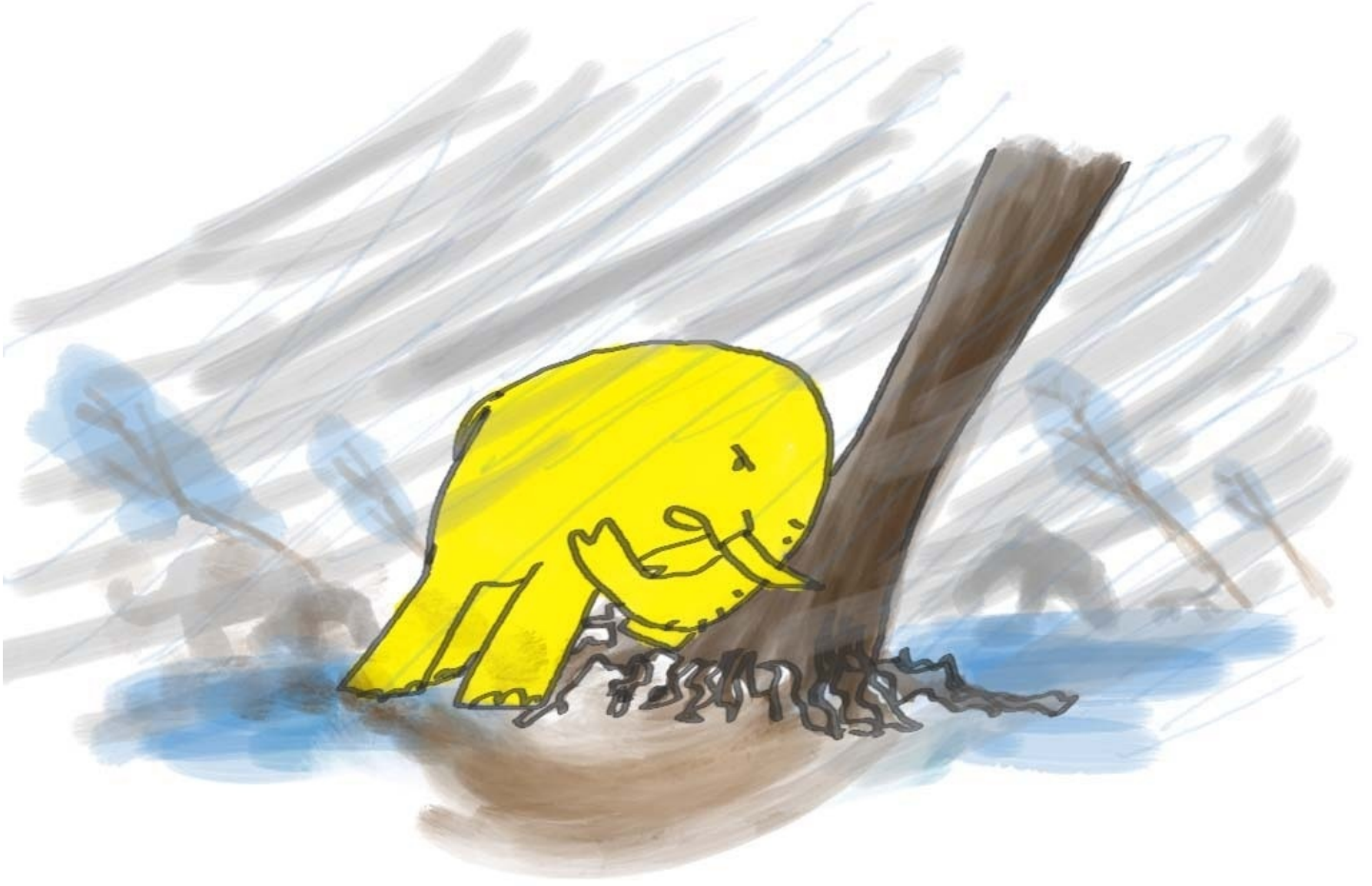


川は今にもあふれそうで



黄色いゾウはびっくりしました。

逃げまどう森の仲間たちをよそに



ゾウは、木を倒し土を掘り  
必死でつみ上げました。

その様子を見ていた森の仲間達は 口ぐちに言いました。



「おい、ありや何やってんだ？」

「あいつまさか、堤防を作ってるのか！？」

「そうにちがいない、きっとみんなのために堤防を作ってるんだ。」

「あの、おこりんぼうの黄色いゾウが？」

「森のみんなに 母さんと同じような思いをさせないぞ！」



森の仲間たちは みんなで力を合わせることにしました。

「黄色いゾウを助けるんだ〜！！」



みんなの力を合わせて とうとう堤防ができあがりました。

川の水がいくらふえても

もう大丈夫でした。



それいらい 黄色いゾウは

森のみんなが幸せになることを

すすんで考えるようになりました。



そしていつのまにか

黄色いゾウはひとりぼっちではなくなっていました。

